

## 月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-1 2

「月夜に浮かれる雌狐って、こんな感じなのかしら……あれが姨捨山ですか」  
「鏡台山（きょうだいさん）と言います。こちらからは姨捨山に登る月は見られません」  
「どうして？」  
「古今集に歌われている月は、あの山の向こう側にある麻績村からの景色です」  
「おみむら？」  
「麻を積む村と書きます」  
「素敵な名前ね」  
「今度ご案内します」  
「いつになりますか。その時はきっとね」

真紀は約束しながら、好いた男の妹と揃いの着物で肩を並べて歩いている様子を俯瞰している分身と喜びを共有していた。

鏡台山に昇る名月を仰ぎ見る観光広場では来賓席用のテントの前で地方の伴奏で踊る立方（たちかた）の輪踊りが披露されていた。

五穀豊穰と月を愛でる馴染みやすい所作の振付けの節々で、型に即興を交える巧者な男踊りと女踊りのフォーメーションが組み入れられ、ひとしお興趣を添えていた。

姨捨駅に降りた観光客達が、緩やかに蛇行する千曲川に沿って広がる善光寺平の夜景を見下ろしながら歩いてくるうちに、じわじわと気持ちを高揚させて、広場にいる大勢の観客に合流してくるので、次第に人波は飽和状態になって行った。

「あの大石が姥石（うばいわ）です。あそこから石段を降りると長楽寺の本堂があって、観音堂や月見堂も観られます」

麻里子は、人でごった返す足もとに気を使いつつ満月が差し昇る方を向いて、真紀の耳朶に触れるようにして言った。

真紀は目前で展開されている山里の月祭りに、たちまち引き込まれていった。

時間の流れが止まった中で、覚えず手を取られた真紀は、否応なしに人混みの前面に引き出されていた。

「ごめんなさい。こうもしないと……」

麻里子は言葉と裏腹に、こうするのが当然とばかりの眼差しを見せて笑った。

「踊ってらっしゃって」と真紀は臨場感と高揚感をない交ぜにして言った。

「今夜は真紀さんの傍にいることにきめているの」

含み笑いで返す麻里子に、「私も、踊りたいわ」と真紀は藪から棒に言った。